

地域広聴事業 島内地区 市長と市民の「こんだん会」事業 報告レポート

市内 35 地区の中では 3 番目となる「地域広聴事業」が開催されました。その概要をご報告いたします。

1 開催趣旨

島内地区では昨年度、「地域づくりセンター機能強化モデル事業」を「防災活動の構築」をテーマに、モデル町会を選定して取り組みました。その一方で、松島中学校生徒会も「防災」をテーマに「地域とつながる」という目標を立てたため、防災モデル事業の一つとしても位置付け、取り組みを進めました。

また、当地区では地区や町内公民館を中心に自主的な活動が盛んであることから、様々な分野で人材の掘り起こしが進んでいる側面もあります。

こうしたことから、「地域の人材育成をどのように進めるか」をテーマに、市長を交えて意見交換し、相互理解と現在の活動への動機付けが促進されるようにしました。

2 日時

令和4年6月19日(日)午後1時30分から午後3時15分まで

3 場所

島内公民館視聴覚室

4 参加人員

臥雲市長ほか23名(発言者 13 名、見学者4名、関係職員6名)

5 懇談を行うにあたって提示した論点

当日は、必ずしもこの論点に沿って話が進んだわけではありませんが、話し合いが始まる前に、こんな話が出るのではないかと示したものです。

- ① 「人材育成」をどうとらえるか…どういう状態を目指すのか
- ② 活動を広げたり新たな人材に出会えるようにしたりするにはどうしたらよいか
- ③ 地域の「基盤」になるものは何か
- ④ 人材育成の上での行政の役割とは何か

6 話し合いの中で出された事項

- ・ 自分が自分でいられる、居心地がよいと思える「活躍の場」「居場所」が多様にあることが要件の一つ。人と人、人と活動が繋がることで、その活動を理解し、関わる人が増える。「楽しい」「わくわく」を体験できる場が多くあることで、様々な活動に出会えるチャンスも増える。



- ・「しょうがなく」ではなく「自ら」「地域をよくしよう」と思えるようにする。また、「地域をよくしよう」という思いを共有する。それには「小さなグループ」がたくさんあること、そのグループに「出会える」ことが必要。その人にとって「関心のあること」をどれだけ提供できるか。何か「大事だ」ということをやっていけば、人は寄ってきてくれる。
- ・「活躍の場を広げる」「人と人をつなげる」「活動に出会う」という面で、「公民館」や「公民館主事」はとても大事な存在。職員が支えてくれている。公民館があることで活動構築がしやすい。自分たちだけでは現在の活動の広がりには至らなかった。
- ・「居心地が良い」と思えると、「こんなこともできる」と気が付ける。安心と感じられるだけで可能性の広がり方が違ってくる。知らなかった人でも知り合いになれば安心できる。そうした意味で小グループの活動があることと、「居心地の良い」と思える「自分」をつくること。それが、公民館があることで実現できている。
- ・島高松町会では、モデル事業の中で「命を守る」を切り口に人と人をつなげようとした。「組長」どうしをつなげ、組内での関係性を高めようとした。また、ワークショップを行って参加する役員の主体性を引き出そうとした。「公民館」と「町会」では、「集まっている人たちの気持ち」や「逃れられるか逃れられないか」などで必ずしも同じレベルでは語れないが、「小さいグループをたくさんつくる」とか「小グループの連携を図る(出会えるようにする)」といった面では一緒。
- ・下田など10数世帯ぐらいしかないところは、町会の中も町会どうしもお互いに助け合わないし何もできない。近隣での支援体制づくりも、専門職にも入ってもらったところで支援計画の中身が充実した。
- ・専門職側にも災害時の対応を一緒に検討することで、平時から地域とつながっておくことの有効性を伝えることができた。
- ・行事などを実際に経験することで「人材育成」ができる。コロナ禍でまる2年「人材育成の場」が中断されている。「活躍の場」をどのようにつくるかが問われている。
- ・昨年度のHUG体験等を通じて、事前の準備がどれだけ大事かが分かった。また、近所の人などどんな人がいるか知っておけば対応が早いと思う。中学生でもできることはあると思ったので、災害のことを前項の皆さんに意識してもらうために、過去の災害に学び考える場を何回か持ちたい。自分の身の回り、近所の状況なども把握しておきたい。
- ・生徒や先生だけではなく、コミュニティスクールや避難所運営委員会、松本大学の学生も関わろうとしてくださっている。多様な方々が関わって、いろんな視点で中学生に考えてもらおうと関わってくれている。地域へ「帰ってきたい」と思える子どもたちを育てたいという思いで関わっている。「子どもたちのために」をキーワードにしている人にかかわってもらって、関係が築けるのは大変ありがたいこと。逆に地区からすると「子どもたちのために」という気持ちを

多くの人と共有して関われる状況にすることが、「地区の人材育成」になる。



9 市長からのコメント

- ・地区をより良くしていきたいと思っている人たちに対して、割り当てしたり義務を課したりするのでは前向きになれない。興味関心があること

を提供できれば、「活躍の場」ができる。新しいことをやっていくことが人材の育成にもつながる。「楽しい」「ワクワクする」ことを(地域づくりセンターや公民館が)どう提供できるか、コーディネートできるか、によって関わる人を増やすことができる。

- ・ 公民館にはハード・建物としての公民館と、ソフト・活動としての公民館の両方がある。今まで取り組んできたことを受け継いで創り上げている。活動を全市的に、若い人にも興味を持ってもらえることに沿って作っていくことは必要。その中で公民館主事の役割の話が出た。職員の原点は市民の役に立つこと。地域の声を実感できるように市民に近いところで一緒に知恵を絞るという経験をしながら、その経験を次の部署でも生かせるよう、楽しいことをやりたいと思うような環境作りもしていきたい。
- ・ 町会と公民館は多少役割が違う、という話が出た。町会はどちらかといえば義務的なところを引き受ける。公民館は前向きな方向に向いていけるか、というところだと思う。市として人材育成のロードマップが必要という話もあったが、市としては若い人も参加する町会活動にしていこうという目指す姿を掲げている。どのようにすればそれに近づいていけるかは地域によって異なる。小さい町会は町会どうし協力しあうことが大事だし、エリアを広げて考える必要もある。規模のメリットを生かすという面と、小さいグループを大事にして積み上げるという両方を意識する必要がある。
- ・ 地域の人材と言ったときに、中学生には今まで「レギュラー」には入っていなかった(と思っていた)。今後はレギュラーメンバーになってもらうほうが中学生にとっても、地域にとっても良いのではないか。中学校は避難所にもなっており、よく知っていることからしても支える側として任せられるのではないか。今後中学の部活が地域移行する。外部の人材を生かして色んな人がかかわることになるが、主人公は中学生なので、「こうしたい」「こんな課題がある」といった声をまとめられ、検討の枠組みの中に反映されたら良い。
- ・ 様々な取り組みをしている中で、35 地区の普遍的な課題でもある「地域人材の育成」について解決に向けた視点を示してもらった。少しでも改善していく上での参考にしたい。

7 まとめ

参加者の皆さんから出していただいた様々なご意見を、論点別にまとめてみますと、大まかに以下の通りとなると思われます。

論 点	参加者の発言内容からの整理
どういった状態を目指すのか 新たな人材に出会えるようになるには？	・ 自分が自分でいられる、居心地がよいと思える「活躍の場」「居場所」が多様にあること ・ 「楽しい」「わくわく」を体験できる場が多くあること ・ 「地域をよくしよう」という思いを持った「小さなグループ」がたくさんあること。また、そのグループに「出会える」こと。 ・ 「居心地の良い」と思える「自分」をつくる場があること ・ 「小さなグループ」が連携・助け合いができる状態をつくること ・ 異世代や様々な立場の人が関わろうとする場があること
地域の「基盤」となるものとは？	・ 「地域をよくしよう」という思いを共有しながら「自ら地域をよくしよう」と思えるようになっている。 ・ その人にとって「関心のあること」に出会えるようになっている。

	・ その道の「専門家」にも出会えるようになっている。 ・ 子どもたちがその地域に「帰ってきたい」と思える、様々な人との出会いやコミュニケーション
行政としての役割	・ 公民館や地域づくりセンターが、「活躍の場を広げる」「人と人をつなげる」「活動に出会う」という場を保証できていること。 ・ 「公民館」という拠点や「公民館主事」というハブになる人材を置いていること。 ・ その道の「専門家」や多世代、様々な立場の人とつながっており、課題に応じてつなげることができること。